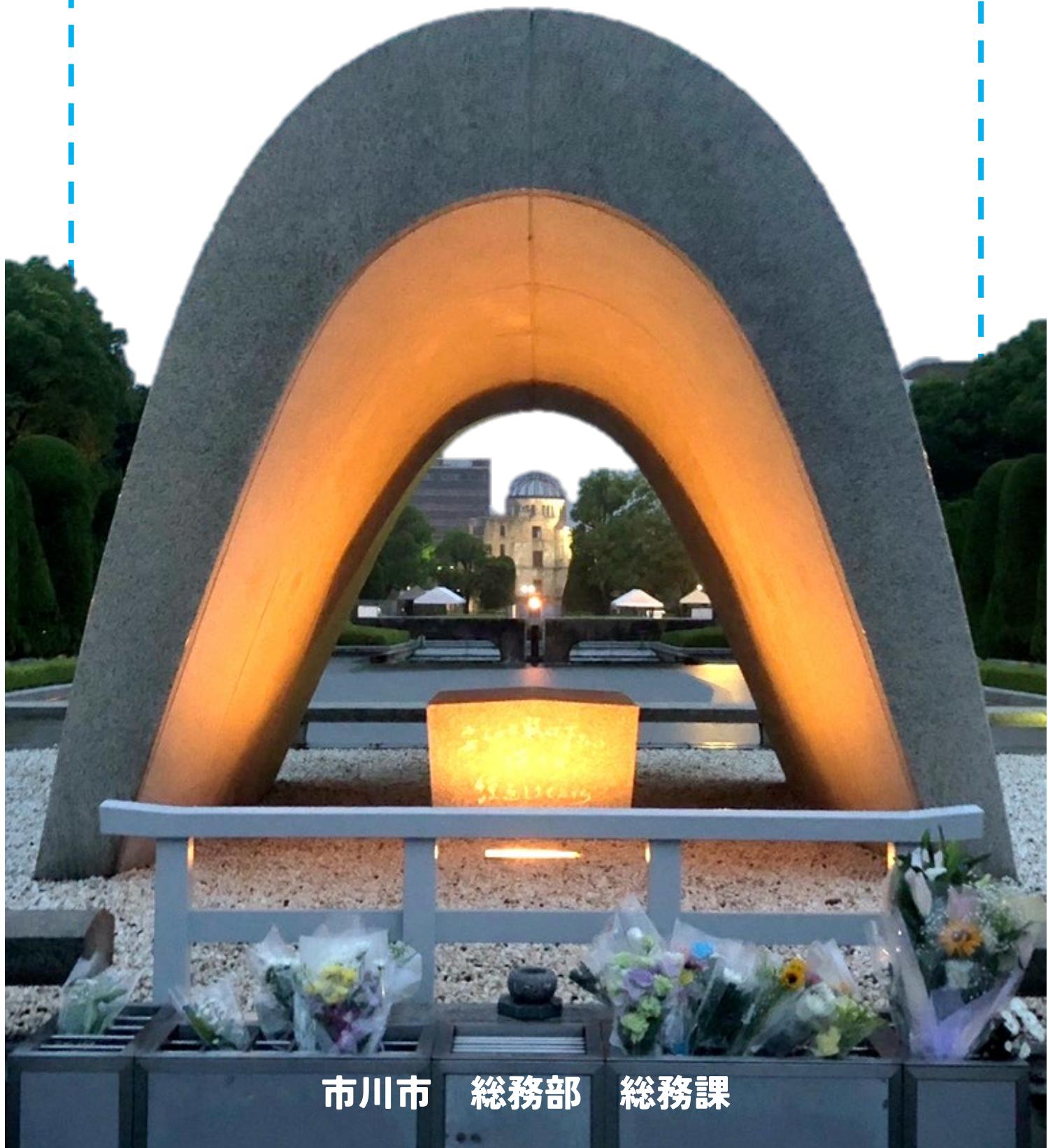


令和7年度 終戦80周年事業

市川市
平和学習青少年派遣団
報告書



市川市 総務部 総務課

目次

はじめに	2
事業概要	4
参加のきっかけ	8
オリエンテーション	10
出発式 — 1日目	12
2日目	14
グループワーク	18
3日目 — 帰市報告会	24
派遣報告・感想	26
平和記念式典 式次第	58
全国平和学習の集い 参加証	63
おわりに	64

はじめに

市川市では、昭和 59 年（1984 年）11 月 15 日に「核兵器廃絶平和都市」を宣言して以来、核兵器の廃絶、生命の尊厳、恒久平和の確立を訴えてまいりました。また、千葉県ではじめての「平和基金」を設立し、様々な平和啓発事業を通じて平和の大切さを、市民の皆様に呼びかけております。

令和 7 年は、終戦 80 年の節目にあたります。今年、被爆者の平均年齢は 86 歳を超え、日本の総人口に占める戦後生まれの割合は 9 割に迫っています。このような中、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の大切さを若い世代に着実に伝えていくことが大切であることから、次世代を担う中学生を広島市へ派遣いたしました。

市内市立中学校・義務教育学校から各校 1 名ずつ選出された中学生 16 名の「市川市平和学習青少年派遣団」は、令和 7 年 8 月 5 日（火）～7 日（木）の日程で被爆地広島を訪れ、「平和記念式典（広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式）」や「第 1 回全国平和学習の集い」に参加し、平和学習を行いました。派遣団の中学生は、全国から派遣された同年代の参加者やユース・ピース・ボランティアと共に学び、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、そして、平和の尊さをそれぞれが実感しました。

この報告書は、平和学習青少年派遣団の活動の一環として、派遣団が広島で学び、感じたことをまとめ、作成いたしました。

今後も市川市は、核兵器廃絶平和都市宣言に基づき、平和意識の高揚を図るため、平和啓発事業を通して、戦争の悲惨さや平和の大切さをより多くの市民の皆様に訴えてまいります。

市川市核兵器廃絶平和都市宣言

世界の恒久平和と安全は、人類共通の願いである。

この普遍の願いにもかかわらず、核軍備の拡張は依然として行われており、人類は核戦争の脅威にさらされている。

わが国は、世界唯一の核被爆国として核兵器の恐ろしさ、被爆者の苦しみを世界の人々に訴え、再び広島、長崎の惨禍を絶対に繰り返させてはならない。

私たち市川市民は、生命の尊厳を深く認識し、国是である非核三原則が完全に実施されることを願い、いかなる国のいかなる核兵器に対してもその廃絶と軍縮を訴え、恒久平和確立のため、ここに「核兵器廃絶平和都市」となることを宣言する。

昭和 59 年 11 月 15 日

市川市



事業概要

市川市では、生命の尊厳を深く認識し、世界の恒久平和を願い、昭和59年（1984年）11月に「核兵器廃絶平和都市」を宣言した。それ以来、この宣言に基づく平和意識の啓発と高揚を図るため、様々な平和啓発事業を実施してきた。

市民の約9割が戦後生まれの戦争を知らない世代となっている中で、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の大切さを継承するために、青少年への平和教育を推進していくことが、平和啓発事業を展開していくうえで重要であると考えている。

そこで、戦後80年が経過する今年は、周年事業として、中学生を対象に「平和学習青少年派遣団」（以下「派遣団」という。）を編成し、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、そして、平和の尊さを学ぶため、広島市への平和学習青少年派遣事業を実施する。

1. 事業の目的

広島市で開催される平和記念式典や全国平和学習の集いに参加し、現地でのフィールドワークや全国の青少年とともに学習することを通して、被爆の実相と平和の大切さを知り、帰市後、平和学習で培った成果を市・学校・地域の平和啓発活動に貢献してもらうことを目的とする。

2. 主催

市川市

3. 期日・派遣先

令和7年8月5日（火）～7日（木）2泊3日・広島市

4. 派遣団の構成及び派遣人員

- (1)中学生16名
- (2)引率者4名（総務課職員2名、教職員または教育委員会職員2名）

5. 団員（中学生）の役割

- (1)事前学習（全2回）、報告会などの会合に出席。
- (2)派遣終了後、団員は感想や記録をまとめた報告書を作成する。また、派遣報告会に出席し、報告を行う。
- (3)在学する学校では、この平和学習に参加した感想や自分が感じたことを他の生徒にも共有する。
- (4)家庭、地域等において平和の大切さを広める。
- (5)派遣終了後、市が実施する平和啓発事業に協力し、より多くの市民に平和の大切さを訴える。

6. 派遣日程

第1日目 8月5日(火)	市川駅集合、出発、東京駅発～広島駅着(新幹線) 広島市内見学
第2日目 8月6日(水)	平和記念式典参列、平和公園・市内見学
第3日目 8月7日(木)	「全国平和学習の集い」参加 ※ 広島駅発～東京駅着、市川駅着、解散

※「全国平和学習の集い」

[目的]

全国の自治体が派遣する青少年と広島の青少年たちが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで若い世代の平和リーダーを育成していくことを目的として、広島平和記念資料館が実施している。

[内容]

- ①広島の中高生による原爆被害の概要説明 ②被爆体験講話(その後、質疑応答)
- ③グループ討議(全国から集まった青少年たちをグループに分けて、いくつかのテーマについて話し合う)

7. おもなスケジュール

6月28日(土)	オリエンテーションの開催(事前学習①) ・派遣事業についての説明 ・平和学習(被爆体験講話、戦時下の市川市の様子) ・派遣生徒同士の交流など
7月31日(木)	出発式の開催(事前学習②) ・市長・教育長への出発の報告 ・スケジュールの最終確認など
8月5日(火)	市川駅集合、出発、市川駅→東京駅→広島駅→広島市内
8月6日(水)	平和記念式典に参列、市内見学
8月7日(木)	全国平和学習の集い、広島駅→東京駅→市川駅、解散
8月21日(木)	市長、教育長への「帰市報告会」を開催 ・市長、教育長への報告 ・総務課への派遣報告の提出 ・「全国平和学習の集い」参加証授与など
11月12日(水)	「核なき世界への連携フォーラム」にて記録動画を放映
11月18日(火)	「派遣報告会」を「平和ポスター表彰式」と同時開催 ・派遣報告の発表 ・記録動画を放映

事業概要

行程表

第1日目 8月5日(火)

- 8:30 集合
市川駅出発
9:40 東京駅発
13:30 広島駅着
16:00 旧広島陸軍被服支廠倉庫 見学
17:00 平和記念資料館 見学
20:30 ミーティング

第2日目 8月6日(水)

- 8:00 平和記念式典 参列
9:30 平和記念公園 見学
13:00 袋町小学校平和資料館 見学
14:00 本川小学校平和資料館 見学
15:00 グループワーク
19:45 とうろう流し

第3日目 8月7日(木)

- 9:00 ヒロシマ青少年平和の集い 参加
13:00 広島駅発
17:00 東京駅着
解散

参加者名簿

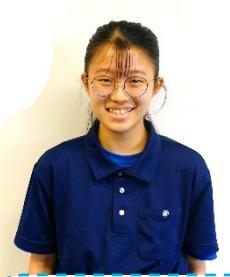
学校名	学年	氏名
第一中学校	3	笠井 知絃
第二中学校	3	黒川 季里子
第三中学校	2	知久 由梨奈
第四中学校	1	高坂 将也
第五中学校	3	安東 青香
第六中学校	3	小谷瀬 創一郎
第七中学校	2	露木 志帆
第八中学校	3	飯村 陽
下貝塚中学校	3	寺原 美乃梨
高谷中学校	3	猪股 凪人
福栄中学校	3	滝澤 青葉
東国分中学校	2	蕭 孝美
大洲中学校	3	勢能 茉那
南行徳中学校	3	森田 陽与
妙典中学校	2	高口 純禾
塩浜学園	2	上原 花音

参加のきっかけ



第一中学校 笠井 知絵

祖母が幼少の頃に戦争を体験しているが、自分がまだ幼かったこともあり、当時の話を聞けなかった。
被爆された方の貴重な体験談を受けて、改めて学びたい。



第二中学校 黒川 季里子

修学旅行を通して、全世界で協力している事を実感して、平和に関する取組を実際に見て、さらに学びを深めたいと思ったから。
今の自分にできることを学びたい。

第三中学校 知久 由梨奈

「第五福龍丸」の展示で、水爆実験の被害者の体験談を見て、写真で見ると実際に見るので、大きく差があることを実感した。原爆ドームを見て、原爆の悲惨さを知りたい。

第四中学校 高坂 将也

小学校の授業では主な出来事を学んだだけなので、広島に実際にに行って、学んだ事実と平和の尊さを、報告会でみなさん伝えたいと思った。

第五中学校 安東 青香

演劇作品で被爆者の差別や苦悩を見て、疑問に思い、原爆やその後の被害について知り、今と当時がどのように違うのか学びたいと思った。平和についての考えを深めたい。

第六中学校 小谷瀬 創一郎

日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受領したことを知り、もっと知りたいと思った。
当時の様子や原爆の影響が今もなお続いている事などを学びたい。

第七中学校 露木 志帆

戦争が舞台の本を読み、当時について関心を持った。本やインターネットで調べられる事の他に、広島市内や平和公園から当時の様子を知り、家族や友達に伝えたい。

第八中学校 飯村 陽

生前、戦時中の辛い暮らしや出撃前の特攻隊の様子を折に触れて語っていた曾祖父が亡くなり、戦争を直接経験した世代がいなくなっていくことに危機感を抱いたから。





下貝塚中学校 寺原 美乃梨

ドイツでユダヤ人迫害の歴史を目の当たりにし、現地の人々の二度と繰り返さないという強い意思と語り継ぐ姿に感銘を受けた。広島で肌に感じて、平和の大切さを心に刻みたい。



高谷中学校 猪股 凪人

近年世界中で戦争が起こっていて、不安定な情勢なので、今一度平和な社会を気付くための学びを深めたい。

自分達には何ができるのか知りたい。

福栄中学校 滝澤 青葉

小学生の頃から平和について興味があり、実際に現地に行って、平和について、原子爆弾について、学びたいと思ったから。

東国分中学校 蕭 孝美

戦争をこの先二度と起させないために、どのようなことがあったのか、自分の目で見て肌で感じたい。戦争のことを深く知り、時間が経つと薄れていく記憶を忘れないために、伝えていきたい。

大洲中学校 勢能 茉那

ヒロシマについて書かれた本から興味を持ち、戦争の悲惨さや多くの命を一瞬でなくしてしまった原爆について、現地に行って学びたいと思った。

南行徳中学校 森田 陽与

広島で生まれ3歳までそこで育った。広島で何が起きたかなんとなくわかつてはいたが、原爆や戦争について知るにつれ、今の自分の目線で改めて知りたいと思った。

妙典中学校 高口 紗禾

広島や長崎で起きた「原爆」の実体を現地に行き、原爆ドームや資料館などを通して深く学びたい。「平和」というワードを重視して、核兵器、戦争の恐ろしさをもう一度学びたい。

塩浜学園 上原 花音

被爆者の方の体験談や、佐々木禎子さんのお話で原爆について知ったが、絵や写真だけでなく、実際に見たり触ったりして、詳しく正しく学びたいと思ったから。



オリエンテーション

■ 6月28日(土)

■ 第1庁舎 5階 第2委員会室

参加する中学生、保護者への事業説明会と事前学習を行い、参加者の自己紹介のあと、被爆体験講話と戦時下の市川について学びました。

被爆体験講話

講師：児玉三智子さん（市川被爆者の会 会長）



7歳のとき、広島で被爆された児玉さんは、現在も語り部として精力的に活動されています。

講話では、原爆が落とされた瞬間の状況や、被爆直後の混乱の中どのように過ごしたかを、当時の記憶とともに語っていただきました。

また、昨年ノーベル平和賞を受賞された、ご自身も所属する日本原水爆被害者団体協議会や、核兵器をめぐる世界の現状についても触れられ、命の尊さと平和への願いを力強く伝えてくださいました。

爆心地から4kmも離れた所に光や爆風が届くほどの威力だったのがとても怖かった。目で訴えたり、皮膚がズルむけたり、水を差しだそうとしてもすぐに亡くなってしまう。どんなに残酷なことだったかがよくわかった。



思い出したくないのに、次の世代へつなげていこうという活動を色んな人が行っているのが凄い。
お話の中には「言葉で表せない」ということがたくさん入っていて、その言葉に全てがつまっていると思った。



戦時下の市川について

講師:田中正文さん(市川市平和教育推進会議 代表理事)



写真家として国内外で戦跡を撮影し、平和を推進する活動をされている田中さん。

戦争の歴史や当時の市川市内の様子について、当時の貴重な写真とともにわかりやすく解説していただきました。

さらに、核兵器禁止条約など世界の情勢と、広島を訪れるにあたって考えておくべき視点についてもお話しいただき、平和を学ぶ意味を改めて考えさせられる時間となりました。

戦時下の市川の状況について聞いたのは初めてで、とても貴重なお話しだった。市川市の人的被害はほとんど無かったため、戦争への興味・関心が薄いと話されていて、恥ずかしさと责任感を覚えた。



東京大空襲があったことは知っていたけど、市川でも被害を受けていることは初めて知った。「原爆が落とされた」ことで広島・長崎が世界で有名だけど、自分達の身近な場所からも知る必要があると思った。



▲ 市川被爆者の会 青木清子さん ▲ 真剣に話を伺う様子

出発式 － 1日目

■ 7月31日(木)

■ 第1庁舎 5階 第2委員会室

代表者による宣誓を行い、市長・教育長から激励いただきました。



■ 8月5日(火) 8:30

■ 市川駅

3日間の荷物を手に集まつくる生徒たち。

保護者や学校の校長先生方が見送ってくださいました。



東京駅 9:39 発の新幹線のぞみ 129号で広島へ。新幹線の車内では、学年や授業、自身の学校の話など、和気あいあいとコミュニケーションを取っていました。



■ 13:00

■ 広島駅

広島に到着しました。

宿泊先に荷物を預け、平和学習の始まりです。



■ 15:20

■ 旧広島陸軍被服支廠倉庫



▲ 足場が組まれた外観

▲ 見学の様子

被爆の痕跡を現在に伝える国内最大級の被爆建造物です。当時は、陸軍の軍服・軍靴等の製造と貯蔵を行う軍事工場でした。令和6年1月に国の重要文化財に指定され、現在、耐震性の確保のため、対策工事が行われています。



爆風や熱の跡を見て、あの日の衝撃の大きさを想像し、胸が締め付けられました。



■ 16:30

■ 平和記念資料館

広島平和記念資料館は、遺品や被爆写真など被爆の事実を伝える実物資料で、原爆の非人道性、原爆被害の甚大さや凄惨さ、被爆者遺族の苦しみや悲しみを伝えています。来館者自身が被爆直後の広島の地に立っているかのような感覚で、その惨状を肌で感じることができます。



もしも、今市川市に原爆が落とされたら私たちはどうなってしまうのかという恐怖と不安と悲しみを感じた。



(「人影の石」を見て)人間が一瞬で蒸発し、影になってしまうことを知り原爆の威力と怖さを感じた。



子供と離れ離れになってしまった母親の子供へ向けた手紙の最後に「さよなら」と書かれているのを見て、今私に両親がいるという事が当たり前ではない、その大切さを改めて感じた。

2日目 に続く

■ 8月5日(火) 8:00

■ 平和記念式典

「広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式」に参列しました。

原爆が投下された8時15分には参加者全員で黙とうを行い、犠牲になった方を偲び、平和への祈りを捧げました。



▲ 自治体席の入口に並んでいる様子 ▲



▲ 式典テント内

平和記念式典での黙祷の時間、私は全身に鳥肌が立ちました。そこに集まった人々全員が、平和への想いと願いを心に込めていることが、言葉ではなく空気で伝わってきたからです。



こども代表で小学生二人が「平和への誓い」を言っていたことから、同じ年の子達も真剣に平和へ向けて取り組んでいるのだから自分も、とさらに気持ちが高くなりました。



テレビでしか見ることのなかった平和記念公園は実際に訪れ自分の目で見ることでしか感じられない空気感がありました。



▲ 式典会場から見た原爆ドーム



■ 9:30

■ 平和記念公園

一般社団法人かたわらの池田さんにご案内いただき、公園内とその周りにある慰霊碑などを見学しました。

見学コース

レストハウス→被爆遺構展示館→旧天神町北組慰霊碑→平和の灯・原爆死没者慰霊碑→被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）→韓国人原爆犠牲者慰霊碑→動員学徒慰霊塔→原爆ドーム（産業奨励館）→島病院（爆心地）

現在の平和記念公園一帯は、広島市の中心的な繁華街として栄えていましたが、原子爆弾により多く人々の生命が奪われ、街並みも一瞬のうちに消え去りました。昭和 24(1949)年 8 月 6 日に公布された「広島平和記念都市建設法」に基づいて、平和記念施設として整備されることとなり、現在の平和記念公園が造られました。



(原爆死没者慰霊碑が)アーチ状に建てられた理由は死没者を雨や風から守ろうとデザインされたからで、私は死没者を思いやる人々の心にとても感動しました。



▲ 原爆死没者慰霊碑 碑文



▲ 被爆した墓石



▲ 韓国人原爆犠牲者慰霊碑



たまたま居合わせた方から当時の平和公園周辺の様子について話を聞いていただき、「ああ、ここでは日常的に伝えてくれている人がいるんだ。」と驚きました。



平和記念公園内にある韓国人慰霊碑の説明を聞く中で私は、「原爆は日本だけが被害者である。」というイメージを持っていたことに気が付きました。

■ 原爆ドーム



原爆ドームの前に立った時、八十年前のあの日に、ここで多くの人が一瞬にして命が奪われたという現実に言葉を失いました。

(西洋風のレンガ造りの建物は)当時は目立っていてきっと人々の憧れだったに違いない。華やかで栄えていたころを想像し、人々の笑顔を思い浮かべると涙が出そうになった。



■ 12:50

■ 本川小学校平和資料館・袋町小学校平和資料館

爆心地から近く被爆当時の校舎の一部が保存されている資料館で、周辺のジオラマや実物資料の展示、被爆後の出来事等について学ぶことができます。

オリエンテーションで被爆体験講話をしてくださった児玉さんが、疎開前に通っていた学校もあります。



式典で石破首相が引用した句は、まさにこのような光景を想起させます。先生と子どもたちが最後まで共にいたこと、その絆の深さと、失われた命の重さに、私は言葉を失いました。



たくさんの生徒が通いにぎわっていたはずの学校も頑丈な校舎の地下さえもが、骨組みだけになってしまうほどの爆風によって壊されていて本当にここに生徒がいたと思うと、背筋が凍りました。



▲ 資料館入口

▲ 壁に残された伝言

■ 15:00

グループワーク → 18 ページ

一般社団法人かたわらの高橋さん・伊藤さん・徳田さんによる、学んだことの振り返りと平和のためのアクションプランを作成するグループワークを実施しました。

心で感じたことや頭で考えたことを整理して、自分自身ができることについて積極的に意見や疑問を発表しあいました。また、どうろう流しの色紙を作成しました。

特に印象に残った仲間の考えは「ヒロシマを知ることで戦争を知り、世界に興味を持つ。そうすると、世界情勢に興味を持ち、政治について考え始める。」と言う意見です。広い視野での意見は、私の新しい視点になりました。



■ 19:45

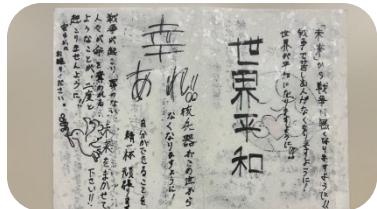
■ 元安川

広島のどうろう流しは亡くなった人々の供養と復興を願い始まつたと言われています。

川の対岸の上空で平和を願うドローンショーが行われており、光が集まり平和のモチーフを表現していました。



川面に流れる灯ろうの光は静かで美しくそれが亡くなった方々への祈りであると思うと、心が静まり、命の尊さを実感しました。



(ドローンによる光のショーで)原爆ドームから丸い地球の形に変化した瞬間があり、広島の原爆は世界の全ての国が関係しているのだと思いました。



一般社団法人 **かたわら** “核のない世界を目指すあなたのかたわらに”

かたわらは、核兵器廃絶を目指す団体(NGO)です。G7、SDGs(持続可能な開発目標)、国連「未来サミット」などで被爆者や市民の声を世界に伝え、核兵器廃絶の必要性を訴えてきました。また「どうしたら核兵器をなくすことができるのか?」という視点から平和・軍縮教育ワークショップの提供をしています。

かたわらホームページより(<http://www.katawara.org>)→



講師:伊藤さん(インターン)



高橋さん(代表理事)



徳田さん(理事)



■ グループワーク①

アイスブレイクも兼ねて、模造紙を使ってキーワードを出しあい、場を和ませながらお互いの考えを共有しました。

生徒たちから出た意見を次のページに抜粋しました。

右ページへ

■ グループワーク②

「私から始めるピースアクション」

平和のためのアクションプランを作成し、各グループは設問ごとに意見をまとめました。

時間の制約もあり、一部のグループはとくに関心のあるテーマを深める形で話し合いを行いました。

各グループのワークシートは、20 ページから掲載しています。

私から始めるピースアクション
【名前】

私が _____ に対して _____ すると _____ のような変化が起きる

派遣された16人が _____ に対して _____ すると _____ のような変化が起きる

市川市の中学校(16校)が _____ に対して _____ すると _____ のような変化が起きる

…… かたわら

テーマ 1

広島に来る前のイメージ

- ・原爆ドーム
- ・路面電車
- ・厳島神社

牡蠣・お好み焼き
レモン・もみじ饅頭

原爆が
落とされたところ

原爆が
落とされる前の
街や原爆ドームの
様子

日本人だけでなく、
韓国・中国人なども
被爆して亡くなっ
ていたこと

放射能の影響や、
被爆者への
差別・偏見

テーマ 2

2日間で見たこと・聞いたこと・知ったこと

テーマ 3

実際に広島に来て気づいたこと

爆心地からの距離
によって、被害が
異なっている。

資料館で海外の人
が泣いていて、国境
を越えて多くの人が
平和を願っている。

慰霊碑一つひとつ
に、たくさんの工夫
があること

原爆であたり一面
が平らになり、そこ
から街を作っている
ので、道が広い。

当時のものを實際
に見て、原爆の影響
の大きさ、残酷さが
わかった。

自分が今できること
を考え、行動に移
すことが大切だと感
じた。

戦争について無知
だった。知らないの
に語ることはできな
いと思った。

当たり前を幸せと
感じ、生きることが
尊いと思えるようにな
った。

テーマ 4

広島に来る前と比較して 今感じていること

私から始めるピースアクション

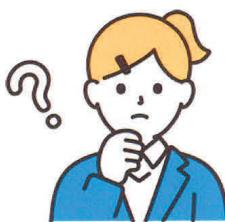
小谷瀬・笠井・森田・勢能

【名前】 小谷瀬・笠井・森田・勢能



私が
身近な人達 に対して
この世界の片隅を見せて すると
状況について知るきっかけになる のような変化が起きる

理: えいどうか頭に残る
小さい子でも理解可能



派遣された16人が
それぞれの学校 に対して
学んだことを発表 すると
原爆について知る人が増える のような変化が起きる

理: 知るきっかけをつくれる。



市川市の中学校(16校)が
市川市民 に対して
平和について考える時間と掛ける すると
都市の日常が幸せなこと多く のような変化が起きる

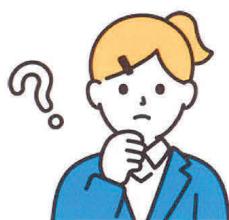
理: 広島のような全体で平和を取ることができる。

私から始めるピースアクション 2016-70

【名前】上原 霧不 飯村 寛原



私が家族に対して
~~あいのまことをあすけると~~と
~~身代わりのめい~~のような変化が起きる
戦争を考えはじめます。



派遣された16人が
学校全体に対して
80年前のヒロシマを伝えると
下のような変化が起きる
ヒロシマを知る→戦争を知る→世界に興味を持つ→世界情勢が
気になり→政治を考えはじめ→選挙に行く



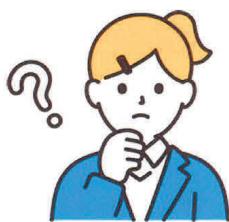
市川市の中学校(16校)が
市川市役所に対して
平和について説明すると
平和に関する取り組みのような変化が起きる
が増えます

私から始めるピースアクション

【名前】黒川、知久、安東、高坂



私が
身のまわりの人 に対して
学んだ事を説明 すると
平和への意識の のような変化が起きる



派遣された16人が
学校のみんな に対して
自分の感じたことを説明 すると
平和についての授業に のような変化が起きる
（
・他人事だと想わない
・あたり前の日常を大切にしてほしい
・戦争の重大さを知ってほしい
・自分達に出来ることを考えてほしい
）



市川市の中学校(16校)が
日本 政府 に対して
平和への尊やさ説明 すると
国民全体の平和への のような変化が起きる
意識の

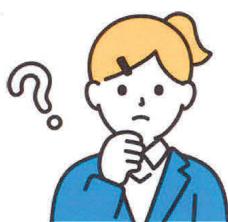
私が始めるピースアクション

【名前】蒲猪股 高麗澤



私が
身の周りの人 に対して
原爆の悲惨さを伝え すると
後世にも記憶が残る めのような変化が起きる

理財被暴者がいなむても原爆は悲惨をもたらすのでいため



派遣された16人が
それぞれの学校の生徒に対して
広島で学んだことを共有すると
多くの人に原爆の悲惨さを ~~め~~ ような変化が起きる
知ることできる

理由：若い世代に一人でモビリティの選択肢が増えていくにつれて、それがどう影響するか



市川市の中学校(16校)が
に対して
すると
のような変化が起きる

3日目 一 帰市報告会

■ 9:00

■ 広島国際会議場 地下2階 ヒマワリ

第1回全国平和学習の集い

昨年まではヒロシマ青少年平和の集いとして開催されており、平和記念式典に参列するために全国の自治体から派遣される中学生等と、被爆の実相やファシリテーションの方法を学んだ広島の中高校生が交流し、被爆の実相や平和の尊さの理解を深めるため実施されています。



▲ 被爆体験講話 講師:岸田さん

被爆体験講話やユース・ピース・ボランティアによる原爆被害の説明を伺ったのち、各グループに分かれてグループ・ディスカッションを行いました。

テーマ1 あなたの地元では、第二次世界大戦中にどのような被害を受けましたか。

テーマ2 今、平和でない状態とはどのようなことがありますか。また、それはどうしたら解決できると思いますか。

広島県内の小・中学校は八月六日を登校日として、黙とうや平和について学習などしているそうです。また、授業時間が多く使って落とされた原爆について学習したりインタビューをしたりなど意識の違いを感じました。



同じグループの人の「戦争は過去のものではない」「平和な世界とは考え方の違いを認め合える世界だと思う」という言葉が印象に残っています。



■ 13:00

■ 広島駅

13時3分の新幹線のぞみ96号に乗車し東京へ。



■ 18:10

■ 市川駅

途中、電車の運休により乗換の変更があったものの、無事に市川駅に到着しました。

■ 8月21日(木)

■ 第1庁舎 1階 ファンクションルーム



全国平和学習の集いでいただいた記念のペナントと時計を市長・

教育長にお渡しし、広島からの帰市を報告しました。

また、全国平和学習の集いの参加証を生徒一人ひとりへ市長からお渡しいただきました。



第一中学校 笠井 知紘

「戦争とはどんなものだろう。」そんな思いが広島派遣参加のきっかけでした。

日々の授業の中で戦争について触れる機会が少なく、実際に被爆地である広島に足を運ぶことで、当時の生活の様子、悲惨さを知ることと同時に、今ある日常がどれだけ平和であるかを深く知ることができるのでないかと思い、今回の派遣事業に参加しました。

一日目は、旧広島陸軍被服支廠倉庫・平和記念資料館の見学に行きました。倉庫の鉄製のドアは爆風によって曲がっていたり、溶けて変色したりしていました。平和記念資料館では、入ってすぐの壁に原爆が落とされる前と後の広島の景色の写真が二枚ありました。見渡すように壁に貼られていることによって、まるで自分がその場にいるような臨場感を持ちました。それ違う人全員が暗い表情をしており、特に海外の方のほうが表情が暗い印象がありました。展示物の中でも特に、焼け焦げた弁当箱や衣服を見た時に自分と同じくらいの年齢の人達が突然命を奪われてしまったという現実に言葉が出なくなりました。

二日目は、平和記念式典参列後、平和記念公園、小学校二校見学、グループワーク、どうろう流しを行いました。広島県の子供代表としての小学六年生二人の平和への誓いに衝撃を受けました。私より年齢が下で戦争を経験しているわけではないのに、話す言葉一つ一つがとても重かったです。



▲ こども代表による「平和への誓い」

式典の中で国際連合事務総長からのあいさつがありました。言葉の中に「広島の人々はただ街を作り上げたのではなく、希望のために街を作り上げた」という部分がとても印象に残りました。平和記念公園内には多くの慰霊碑があり、形・向き・材料など細かい部分まで意味が込められていました。例えば、平和記念公園で初めて建てられた、原爆死没者慰霊碑の形は公募によって選ばれ、

はにわの家の上の部分にすることで亡くなった人を雨・風から守る家のような役割という意味が込められています。他にも、韓国人のために建てられた韓国人原爆犠牲者慰靈碑があり、韓国では亡くなった人は亀に乗って天国に行くと信じられているため、亀の上に慰靈碑がありました。また、亀の頭は韓国の方角に向いていて、首にはたくさんの千羽鶴がかけられていたことから、文化を雑に扱わず尊重しているのだなと感じました。

三日目は、全国から集まった中学生と六人一グループになり二つのテーマに沿ってディスカッションを行いました。特に深く話し合うことができたのは二つ目のテーマである「今、平和でない状態とはどのようなことがあるか」についてです。話し合いを進めていく中で、広島県と他県の平和学習には大きく違う取り組みがあることに気づきました。広島県内の小・中学校は八月六日を登校日として、黙とうや平和について学習などしているそうです。また、授業時間が多く使って落とされた原爆について学習したり自分たちからインタビューをしたりなど意識の違いを感じました。

この広島派遣を通して、教科書を見る、被爆者の方の話を聞くだけではわからない戦争の悲惨さ、生活の様子を学ぶことができました。今までではどこか他人事として提えてしまっていた部分がありましたが、自分の目で遺品、慰靈碑などを直接目にし、「戦争を経験していない世代」だから終わりなのではなく、知らないからこそ積極的に周囲の人たちに伝え、学び続けていくことが大切だと思いました。



▲ 式典のテント内

第二中学校 黒川 季里子

いつか訪れる平和のために

今、世界では戦争が起きています。関係ない一般市民も多くの被害を受けています。そんな悲しい事が起きている世の中を私は平和とは言えません。そして私は、自分が生きている間に平和は訪れないと思います。しかしこの夏、平和のために行動している人達を見て、平和の兆しが少し見えた気がしました。

今年で広島に原爆が落とされてから八十年。私は二つの疑問を持ち被爆地、広島を訪れました。

私は日頃から、学校で広島に関しての平和学習をしてきました。広島では平和記念資料館を見学したり平和記念式典に参列したりしてきました。平和記念資料館では私が感いていた疑問一つ目の答えを見つける事が出来ました。その疑問は「具体助な原爆の被害」です。資料館には実際の写真や、その時着ていた服などが展示されていました。そこで一番心に残った事は、隣にいた外国人の方が展示を見て泣いていたことです。その展示の内容は、原爆で亡くなった人は日本人だけでなく韓国人やアメリカ人の方も亡くなっていたという展示でした。私は式典でも感じましたが、平和な世界のために日本だけでなく全ての国ではないが、多くの国が協力していました。

二つ目の疑問は「今行っている平和や戦争の取りくみや、それに対する考えは何なのか。」です。私が出した答えは、戦争をひきずっている人は少なく、次の平和に向かっている人が多いということです。一番大きな理由、式典で「ひろしま平和の歌」を合唱したときに、全員の顔が明るく前を向いていたことです。そして、こども代表で小学生二人が「平和への誓い」を言っていたことからも、同い年の子達も真剣に平和へ向けて取り組んでいるのだから自分も、さらに気持ちが高くなりました。

今回の体験を通して、少しでもはやく平和な世界にしなくてはいけないと思いました。そのために考えた自分に出来る事は、今回経験したことを学校のみんなに伝えることです。いずれ被爆者はいなくなってしまう、そしたら後世に伝えるのをやめるのではなく、だからこそ私たちが伝えていかなくてはいけないと思います。そのために若いうちから、戦争についてみんなが学んでいった方がいいと思いました。そしてこの行動はSDGs 16 番「平和と公正をすべての人に」の達成にもつながると思います。いつか訪れる平和な世界のために少しでも自分に出来ることをしたいです。



▲ 出発式での宣誓



▲ 平和記念公園内を見学

第三中学校 知久 由梨奈

2025年、今年で広島と長崎に原爆が投下されてから80年がたった。原爆投下について写真などで学ぶだけではなく、実際に自分の目で見て学びたいと思い平和学習青少年派遣に参加した。

初めに見学した場所は、旧広島陸軍被服支廠倉庫だ。この場所は主に陸軍の兵士の服や靴などの製造・保管・供給を担う施設として、使用されていた。建物全体が鉄筋コンクリート造りだったため、爆心地から約3キロメートル離れていたにも関わらず、ほとんど原型のまま保存されていた。鉄製の扉がへこんでいて、爆風の強さや影響を目で見て感じることができ、当時の様子についても詳しく知ることができた。



▲ 旧広島陸軍被服支廠倉庫

次に向かったのは平和記念資料館だ。原爆投下前にぎやかで活気あふれていた町の様子がわかる写真や、疎開先で家族と離れ離れになった子どもと両親の手紙のやり取りの記録、女の子が乗っていた実物の三輪車が展示されていた。

しかし、次の部屋へ行くと家一つもみえない瓦礫だらけの写真、消えた人々、ついさっきまであった当たり前の日常がたった一発の原爆で消えてしまった。目をそむけたくなるほど悲惨な情景だった。もしも、今市川市に原爆が落とされたら私たちはどうなってしまうのかという恐怖と不安と悲しみを感じた。広島に行く前の事前学習で「男女の区別もつかない遺体がたくさん川に浮かんでいた」と書いてあったのを思い出した。どういう意味か分からなかったが、資料館の絵や写真を見て一瞬で理解した。それほど悲惨な状況に悲しい気持ちで胸が詰まり原爆投下の残酷さを改めて身をもって感じた。そして被爆したのは日本人だけではなく韓国人の人や他の国から来た留学生などもいたことを知った。

2日目は今年で被爆八十周年を迎える平和祈念式典に参列し、被爆体験講話をしてくださった児玉さんが通っていた本川小学校と、袋町小学校を見学した。

平和祈念式典では想像していた以上にたくさんの方が来場していた。そして外国人観光客も参列しに来ていた。広島市長の平和宣言の中で、「核兵器のない世界を創るためにには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話してみることが大事である。」という言葉が私の心に残った。自分の価値観が相手と違っていても話し合うことが重要であり、お互いを認め合うことが大切だと改めて感じた。

現在の平和記念公園は、原爆投下前は中島地区と呼ばれており、映画館や大きな旅館がある西洋様式が取り入れられた素敵な街だった。しかし被爆後は瓦礫だらけできれいだった街並みも一瞬のうちに消え去ってしまった。私はこの話を聞いて驚きで言葉が出なかった。なぜ罪のない人々が苦しい思いをしなければいけなかったのかと私は思う。

平和記念公園内を散策し最後に原爆ドームへ向かった。ここは昔、産業奨励館として使用されており、広島物産展として賑わっていた。当時の家は木造が主流となっていたが、産業奨励館は西洋風の外観で一部鉄骨を使用したレンガ造りの建物となっていた。そのため当時は目立っていてきっと人々の憧れだったに違いない。華やかで栄えていたころを想像し、人々の笑顔を思い浮かべると涙が出そうになった。

「なぜ原爆を投下しなければならなかったのか。」という疑問は全ての人が思っているだろう。戦争を体験していないくとも、被爆者の方々のお話を聞いて、被爆した建物や慰靈碑を見学し、写真や絵を見て多くの思いをはせることができる。世界が少しでも平和になるためには一人一人の平和の意識を高める必要があると、平和学習に参加して私は強く感じた。

第四中学校 高坂 将也

広島に行ってみて

僕が広島に行って一番最初に思ったことは空気が重いなと感じたことです。その空気の中には被騒して無差別に殺されてしまった人々の悲しい思いが詰まっていました。

広島に到着してまず初めに、陸軍の被服倉庫に向かうと、厚さ3センチほどある鉄の窓が爆風の影響で内側へ、いとも簡単にへこんでいるのが目に入りました。爆心地から多少離れているのにこれほどの威力を持つ原爆に恐怖を抱きました。その他にもレンガが熱で溶けて下に垂れています。こげたりしていました。触ってみるとざらざらしている手触りのはずのレンガが、つるつるになっていて、全くの別物へと変化していました。特に心に残っているのが、建物内から臭う異臭です。人や物が焼け焦げた臭いが建物の周りへ広がっていました。この中で何人の人々が亡くなったと思うと恐ろしくて仕方がありませんでした。

次に平和資料館へ訪れると、そこには被爆する前と被爆した後の実際の広島の写真。被帰していくがって苦しんでいる少女の写真。被爆して当たり前の日常が一瞬にして狂ったことがあらわされている文。お母さんが作ってくれたお弁当を食べるのを楽しみに出かけたのに食べることなく殺されてしまった少年。被爆して焦げたり、燃えカスになってしまったりした遺品。そして今では絶対にない、被帰して亡くなってしまった人々の山積になった遺骨の写真。今では考えられない出来事の連発で私は言葉を失いました。

翌日の八月六日はまず原爆死没者慰靈式・平和祈念式に参加しました。黙とうでは死没者の方々に挨拶をし、「ゆっくり休んでください。これから同じ過ちを繰り返さないようにしていきますから。」と言いました。被爆の方々がどれだけ苦しい思いをしたかがよく知らされました。

式典終了後ガイドスタッフにガイドしてもらいながら、平和記念公園の各箇所を歩き回りました。原爆供養塔、平和の鐘、韓国人の慰靈碑、原爆ドーム、原爆慰靈碑の5つを紹介してもらいました。その中でも特に心に残っている物が2つあります。

一つ目は韓国人の慰靈碑です。この慰靈碑の土台がカメになっていて、その理由は死んでしまった人はカメに乗って、天へ行くという韓国での言い伝えがあるためだからです。更に土台のカメが向いている方向は韓国人の母国である韓国に向けて作られているのです。この韓国人の慰靈碑が作られた理由は被爆したのは日本人だけではないという理由だからだと言われています。私は、この他人を思いやる心に、強く心を打たれました。

二つ目は原爆慰靈碑です。この慰靈碑は 1952 年に初めて建てられた慰靈碑です。この慰靈碑のデザインは公募されたものです。アーチ状に建てられた理由は死没者を雨や風から守ろうとデザインされたからです。私は死没者を思いやる人々の心にとても感動しました。

そしてガイドスタッフさんによるグループワーク後、灯籠流しに参加しました。私たちは平和に対する思いを 4 面に 16 人分書き、1 つ川へ流しました。そして戦後 80 周年でドローンパフォーマンスが開催されました。空には、鶴や原爆ドーム、地球などが描かれました。パフォーマンスを見てもう一度平和に対する思いを考え直し、就寝しました。

三日目の八月七日は、朝からヒロシマ青少年平和の集いに参加し、被爆者の体験話を聞き、他の県の人たちとグループワークをし、平和について共有しあいました。そしてお昼に新幹線に乗り市川へ帰りました。

私はこの 3 日間を通して家で平和の大切さを考え直しました。今こうして平和に暮らせているのは昔の人々のたゆまない努力の結果だと私は考えています。いま、日本国外ではいくつもの戦争が起きていて平和に暮らすとのできない人々がいる中で、私たちは簡単に得ることのできない平和の中で暮らすことができています。みなさんも、この簡単に得ることのできない平和について今一度考え方でみてください。そしたら平和の大切さがとてもよくわかると思います。



▲ グループで意見の共有

第五中学校 安東 青香

平和学習を終えて感じたこと

平和とは何だろうか。戦争がないこと、喧嘩をしないこと、正解は沢山あると思う。その中で私は、「当たり前のことが当たり前にできること」そんな世の中が「平和」だと考える。今回の平和学習を通してよりそう思った。

ご飯もなく食べられず、いつもお腹をすかせる人々、原爆が投下され、焼けただれて苦しむ人々、後遺症に苦しむ人々、原爆孤児になる人々。たった一発の原子爆弾で広島の人々の当たり前の日常が奮われてしまった。

原爆投下直後の地上の温度は三千度から四千度にもなった。半径五百メートル以内に居た人のほとんどが一瞬にして焼けて亡くなってしまった。広島平和記念資料館にあった「人影の石」は爆心地から二百六十メートルの場所にあった。当時、そこには人が座っていた。原爆が投下された時、その人が熱を吸収したことにより、そこだけ花鉢岩が剥がれずに、残っていた。それを見た時、私は人間が一瞬にして蒸発し、影になってしまうことを知り原爆の威力と怖さを感じた。恐怖だ。

原爆の犠牲者は日本人だけではない。当時日本は韓国併合を行っていた。そのせいで、日本に来ていた朝鮮の方は沢山いた。その中で広島にいた朝鮮の方達も、原爆の被害者になった。日本の国民や、朝鮮の方はなにも悪いことはしていないのに原爆の犠牲者になった。原爆を落としたアメリカにも、戦争を行なった当時の日本政府にも、怒りが沸き上がってくる。

原爆ドームを見た時、まるで時が止まっているように感じた。ドームの半分は崩れ、中には瓦礫の山があり、ドームを包む震団気から当時の様子がありありと頭の中に浮かんできた。原爆ドームが「もう二度と同じ事を繰り込ましてはいけないよ。」と語りかけているようにも感じた。

今回の広島での平和学習では、原爆の悲惨さを感じた。また、平和の鐘や平和の池、平和の灯を見て、核兵器を無くすことや亡くなった方を大切にしていることも感じた。

核兵器を無くすため、戦争を無くすために私達ができるることは、今回の平和学習で見てきたものや、感じたことを伝えることだ。今は、家族や友達、学校の人達に伝えることができる。私の夢は、教師になることだ。将来は、生徒達に戦争の非像さや、恐しさを伝えようと思っている。戦後八十年が経ち、戦争経験者は少なくなった。今度は、私達が代わりに伝え、平和な未来を作りたい。



▲ 平和記念公園内 被爆遺構展示館



▲ 原爆供養塔

第六中学校 小谷瀬 創一郎

平和学習青少年派遣事業報告書

今回私は青少年派遣団として3日間広島を訪れ、原子爆弾と平和について深く学んできました。広島の町は、現代的なビルが建ち並び豊かな木々が息づく、まさに平和という印象を受けました。80年前にこの町に原子爆弾が投下されたとは、想像もつかないほど穏やかな光景でした。

■ 平和記念資料館での学び

平和記念資料館では、印象的な展示物に触れることができました。原爆投下により建物が一瞬で崩壊する様子を表現したプロジェクションマッピングは、当時の凄まじい破壊力を目の当たりにするようでした。また、赤、青、紫色に変色した死体や校庭で被爆した子どもたちを表現した絵画、そして人影が焼き付いたコンクリートの展示物は当時の悲惨さを物語っていました。被爆時の写真や、熱線によってボロボロになった衣服、さび付いた三輪車、焼き焦げたお弁当箱等、残された品々からは、多くの尊い命が簡単に奪われた原子爆弾の非人間性を強く感じました。軍隊とは関係のない、罪のない赤ちゃんからお年寄りまでが無差別に殺されたという事実を知り、心の底から恐ろしさを感じました。これらの展示を通して、原爆が落ちた一瞬で人々を消し去った情景が目に浮かびました。

■ 平和記念式典への参列

平和記念式典に参列をしました。テレビでしか見ることのなかった平和記念公園は実際に訪れ自分の目で見ることでしか感じられない空気感がありました。教科書や本インターネットの情報だけでは知りえなかった当時の日本の状況や、原子爆弾投下後の惨状、そしてそれらを体験された被爆者のお話を聞くことで勉強になりました。



▲ オリエンテーションで考えた派遣の目標

■ 平和学習を通しての気づきと決意

今回の平和学習を通して、私が普段当たり前のように享受している日常が、決して当たり前のものではなく、どれほどかけがえのない幸せであるか痛感しました。同時に自分がもつ日本の歴史に関する知識の少なさを認識し、今後さらに深く学びを深め、平和と自由についてより深く勉強していきたい。

■ 後世への継承

平和の大切さを後世に伝えていくために、私たちにできることは、まず戦争の歴史と悲惨さを家族や友達をはじめ伝えていくことが大切だと考えます。さらに、苦しい体験をされながらも、戦争の悲惨さや平和の尊さを訴え続けてこられた被爆者の方々の思いを受け継ぎ、多くの人々に伝えていくことが、何よりも大切だと考えます。

今回の広島での平和学習は、原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、そして平和の尊さを改めて深く学ぶ非常に貴重な機会となりました。この学びを胸に刻み、これから行動へ繋げていきたいと思います。



▲ 旧広島陸軍被服支廠倉庫

第七中学校 露木 志帆

広島と平和

広島に滞在した三日間で、言葉では表しようのない悲しみや怒り、憎しみ、苦しみを感じました。それと同時に、今を生きる私は、戦争を知り、平和について考え、平和を創り上げていきたい、と思いました。

広島に着き、まずは旧広島陸軍被服支廠へと向かいました。爆心地から2.7キロメートル離れているにもかかわらず、爆風によって強く頑丈な鉄製の扉は大きくへこんでいて衝撃を受けました。

その後、平和記念資料館を見学しました。そこで見たものは、目を背けたくなるような事実ばかりでした。原子爆弾が投下される直前まで日常を送っていました。町は生きていたのです。それが、一発の原子爆弾によって、簡単に奪われてしまいました。とてもじゃないけど信じられないような光景でした。皮膚がただれている人、目玉が飛び出している人、人骨を含む溶融塊もありました。ある絵には、「原爆が怖い。原爆が怖い。」と書かれていて、胸が苦しくなりました。そして、こんな思いをもう誰にもさせてはならない、と私は強く思いました。

さらに、黒い雨や死の斑点など、放射線による被害もありました。危険だとわかっているながらも放射線を用いた原子爆弾は、なんと非人道的な武器なのでしょう。唯一の被爆国である日本は、原子爆弾の残酷さや醜さを伝えていく必要があると思いました。

被害を受けた原爆ドームは、周りの建物と比べるともう色褪せしていました。だけど、あの時の原子爆弾の悲劇を風化させないために、どんなに時を経ようとも原爆ドームは後世に残していってほしいと思いました。

その日の夜、「私から始めるピースアクション」と言うグループワークを行いました。平和について共に学び、考えた仲間と意見交換することで有意義な時間になりました。特に印象に残った仲間の考えは「ヒロシマを知ることで戦争を知り、世界に興味を持つ。そうすると、世界情勢に興味を持ち、政治について考え始める。」と言う意見です。広い視野での意見は、私の新しい視点になりました。

最終日には、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。他県の中高生と意見交換をし、自分の考えを深めることができました。この場で考えを共有し、尊重し合う活動は、とても良い経験になりました。

私はこの機会を通して、生きることは尊いと思うようになりました。自分で平和をもっと考えたい、周りの人達と共に考えていきたい、と強く思いました。

その第一歩として、同じ過ちを繰り返さないように戦争を知り、感じたことや考えたことを未来へ繋げることが大事です。この事実を、歴史を風化させないことを意識して生活していこうと思います。

そして、当時の人人が生きられなかつた一日、生きたかつた一日を、一歩ずつ大切に歩んでいきたいです。当時は明日があるかわかりませんでした。しかし、今では明日の事を考えて生活しています。夢を描くこと、自分の可能性を信じること、未来が想像できること。それを当たり前と感じず、今、生きている日常を噛み締めて生活したいです。

今の日本は単に戦争がないというだけで平和といえるのか、平和を一括りの意味にしてもよいのか、本当の平和が訪れる日はくるのか。

考えれば考えるほど難しい課題ですが、私はこれからも平和と向き合って生きたいです。



▲ レストハウス ジオラマを見学

第八中学校 飯村 陽

令和7年度 平和学習青少年派遣事業 派遣報告

■ 広島平和記念資料館

建物疎開の作業現場で被爆し亡くなった中学生が持っていた弁当箱を見て、弁当を食べるのを楽しみにして出かけた中学生の姿、それを作った優しいお母さんの姿が目に浮かびました。真っ黒になった三輪車からは、それに乗って遊ぶ男の子の笑い声が聞こえてくるような気がしました。暑い中、作業に励んでいた中学生や元気に遊んでいた男の子のことを思うと、言葉に言い表せない気持ちになりました。時代は違えど、一人一人に私と同じ家族や未来があったのだということ、その未来が一瞬にして奪われたということが分かり、大きな衝撃を受けました。

これまで私は、原爆によって 35 万もの命が奪われ、その後も苦しんでいる人々がたくさんいるということは理解していました。しかし、あまりにも大きすぎるその数から、悲しみの大きさを想像することはできませんでした。広島を訪れ、犠牲になった方一人一人の死を深く悲しみ、残された人々の思いに触れることによって、このような悲劇が 35 万、それ以上にあったのだということを本当の意味で理解したように思います。



▲ 平和の灯について説明を受ける

■ 平和記念式典

平和記念式典では、国内外から多くの人々が集まり、犠牲者への追悼と平和への誓いが行われました。黙祷の時間、私は平和の尊さと、それを守る責任について考えていました。戦争のない世界はただ願うだけでは実現せず、戦争によって傷ついた人々の記憶を継承し、一人ひとりが平和のための行動や発信をする必要があると強く思いました。式典の中で、小学6年生の子が平和への思いを全世界に向けて発言している姿を見て心を打たれました。年下の子が真剣に平和について考え、伝えようとしていることに感動し、自分ももっと平和について向き合い、考え、行動していくなければならないという気持ちが高まりました。

■ ヒロシマ青少年平和の集い

ヒロシマ青少年平和の集いでは、全国から集まった中高生とグループワークを行い、それぞれの地域の戦争被害や平和活動を紹介したり、各々の平和についての意見を交換したりしました。同じグループの人の「戦争は過去のものではない」「平和な世界とは考え方の違いを認め合える世界だと思う」という言葉が印象に残っています。

■ 今回の派遣を通して

この広島派遣では、原爆遺構の見学を通して原爆の実相を知り、平和記念式典への参列、ヒロシマ青少年平和の集いへの参加を通じて、平和の尊さについて考えを深めることができました。

「平和は当たり前ではない」ということを強く実感しました。原爆によって失われた命や人生、そしてその後も続いた苦しみを知ることで、今の自分の生活がどれほど多くの犠牲の上に成り立っているかを考えさせられました。平和は誰かが守ってくれるものではなく、自分自身が守り、広めていくものだと思います。これからは、広島で学んだことを周囲に伝え、平和の大切さを共有することで、自分なりの平和活動を続けていきたいです。家族や学校全体にこの広島派遣で学んだことや平和についての考え方を発言し、平和を願う人々の思いを胸に未来に向けて行動していきたいと思います。

下貝塚中学校 寺原 美乃梨

平和学習青少年派遣を終えて

■ 「語り継ぐ平和、築く幸せな未来」

この派遣に参加するきっかけは、昨年、市川市の中学生海外派遣事業でドイツを訪れたことです。ドイツでも、第 2 次世界大戦中にユダヤ人迫害という残虐な出来事がありました。ホームステイ先のホストシスターが通う学校を訪問した際、80 年前にその学校に通っていたユダヤ人少女、エリザベスさんの慰霊写真が飾っていました。彼女は 19 歳という若さで迫害により命を奪われました。

私はこの事実を知り、大きな衝撃を受けました。そして、ドイツの人々が「このような過ちは二度と繰り返さない」と強く誓い、次の世代に伝え続けている姿が印象に残りました。こうした経験から、私は戦争に興味を持ちこの派遣に参加しました。

原爆ドームを初めて目にしたとき、周囲の近代的な建物とは異なる、異質な空気がそこに漂っていました。爆風によりひしやげた鉄骨、粉々に碎けたがれき。言葉では表すことのできない気持ちに胸が締め付けられました。

平和記念資料館で特に心に残ったのは、被爆した人が着ていた、もはや「服」と呼べないほどに裂けた布です。その布には赤黒いシミが残っており、原爆による痛みと声なき叫びが今もそこに刻まれているようで、鳥肌が立ち、強い憤りを覚えました。

展示室を抜けた先の渡り廊下には、2 冊の伝言ノートが置かれていました。そのページには 10 を超える言語で、平和の大切さや核の恐ろしさが書かれていました。異なる国、文化の人々が 80 年前のヒロシマの惨禍を目にして平和について日本以外の国の人々が考えてくれたことに心を突き動かされました。

平和記念公園内にある韓国人慰霊碑の説明を聞く中で私は、「原爆は日本だけが被害者である。」というイメージを持っていたことに気が付きました。戦争を掘り下げるに日本は加害者でもありました。異国の地で、辛い労働や差別に苦しみながらも生きていた人々が居たことも、忘れてはいけません。

平和記念式典での黙祷の時間、私は全身に鳥肌が立ちました。そこに集まった人々全員が、平和への想いと願いを心に込めていることが、言葉ではなく空気で伝わってきたからです。平和への誓いで「一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。」この言葉は世界中の人が知り、言葉の意味を理解することが必要だと思います。

■ 「戦争はしてはいけません。」

私が生まれるずっと前から、世界中の人々がその言葉を繰り返し訴えてきました。

しかし、それでも戦争は終わっていません。なぜなのでしょうか。

この派遣の中で、私はその理由を考え続けました。戦争には国や民族、宗教、経済、歴史など、さまざまな要因が複雑に絡み合っています。その絡まった糸を争いをせず解くのは、100年、200年、あるいはそれ以上の長い時間がかかります。ときには、互いの誤解や不感が、さらに糸を固く結んでしまうこともあります。だからこそ、私たちはあきらめてはいけないのです。時間がかかるからこそ、今すぐにでも一歩を踏み出す必要があります。もし「自分一人では何も変えられない」と思ってしまえば、その瞬間から変化の芽は摘み取られていきます。

平和は、政府や国際機関だけでつくれるものではありません。

約80億人、一人ひとりの行動や意識の積み重ねが、やがて社会全体の価値観を変えていきます。相手の立場に耳を傾け、違いを受け入れ、思いやりを持って接する。そんな小さな行動の連続こそが、絡まった糸を少しずつほどいていく力になると信じています。

私には平和の大切さを「知った」だけでなく、それを「伝える責任」があります。世界が平和になるまで、途切れることなく広島で見た光景や聞いた声を言葉にして伝えています。そして、いつかこの世界から「戦争」という言葉が歴史の中にしか存在しない日が来ることを信じて、歩み続けます。



▲ 袋町小学校平和資料館

高谷中学校 猪股 凪人

私は今回、平和体験学習で広島を訪れました。広島は、1945年8月6日に世界で初めて原子爆弾が投下された地であり、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶには非常に重要な場所です。教科書などに載っていない、現地を訪れない限り知ることのできない「生きた学び」を体験することができました。

最初に訪れたのは旧広島陸軍被服支廠です。この建物は大正時代に建設された軍用施設で、当時としてはかなり珍しい鉄筋コンクリートでした。また、ヨーロッパの建築家を招いて「縦積み」と呼ばれる独自の外壁設計が施されたため、爆心地から2.7kmの距離があり、2000°Cにも及ぶ爆風に晒されながらも倒壊を免れました。原爆の熱線により焼き付いたレンガの塗装や、爆風によってゆがんだ鉄製の扉は原爆の威力を今もなお生々しく物語っていました。

次に訪れたのは広島平和記念資料館です。館内には、被爆直前の活気のある広島市内の写真、原爆によって破壊された街の写真、被爆者の遺品、当時の状況を伝える展示が数多く並んでいました。展示品の中には焼け焦げた制服や溶けたガラス瓶、黒く変色した弁当箱など、原爆の凄まじい破壊力を物語る実物資料がありました。それらを目の前にすると、言葉を失うほどの衝撃を受けました。一つ一つの展示が、当時の人々の苦しみや悲しみを静かに語りかけてくるようでした。展示室の一隅には、千羽鶴で知られる貞子さんの人生に関する展示もありました。原爆の後遺症で夢をあきらめ、自分が死ぬとわかっていても、周囲の家族や友人を悲しませまいと明るく振舞った、そんな貞子さんの一生に関する展示を見て、私は胸が締めつけられるような思いになり、命の尊さと平和の意味を深く考えさせられました。



▲ 被爆遺構展示館の入口

2日目は平和祈念式典に参列しました。市議会議長、市長、総理大臣、そして県知事の挨拶を通して、日本はこの先の時代にどのように向き合ってゆくべきか、改めて考えさせられました。県知事は演説において、かつては「国破れて山河あり。」という言葉が表すように戦争で荒廃しても、再生への道は残っていました。ですが今は「国守りて山河なし。」核戦争が全面的に起これば人類全体が不可逆的な荒廃に見舞われることになるでしょう。このような結末があり得る安全保障にどのような意味があるのだろうか。と仰っていました。この言葉は、過去の戦争を乗り越えてきた日本の歩みと、これから世界の在り方を鋭く問いかけているように思えました。かつての「山河」は、戦後の人々の努力によって再び息を吹き返しました。しかし、核による破壊は、自然も文化も、そして人間の尊厳すらも消し去ってしまうかもしれません。だからこそ、私たちは「平和を守る」という選択を、日々の暮らしの中でも意識していく必要があるのだと感じました。

式典後、公園内を見学した後、本川小学校と袋町小学校の被爆資料館を見学しました。この2つの小学校は爆心地からおよそ500m程度の場所に位置しており、原爆が投下された当時の小学校の様子を鮮明に残していました。原爆の爆風によってボロボロになった校舎や、爆発によって跡形もなくなった文房具など、多くのものが当時の子どもたちの日常が、突然奪われたことを物語っていました。

式典で石破首相が引用した句「太き骨は先生ならむ そのそばに 小さきあたまの骨 あつまれり」は、まさにこのような光景を想起させます。教育の場であったはずの小学校が、一瞬にして命の終わりの場となった現実。先生と子どもたちが最後まで共にいたこと、その絆の深さと、失われた命の重さに、私は言葉を失いました。

この体験を通して、私は「平和」は当たり前ではなく、多くの犠牲の上に成り立っていることを学びました。これから到来するであろう「被爆者なき時代」にて、戦争の悲惨さを忘れず、次の世代に語り継ぐことが私たちの責任であると強く感じました。また、日常の中でも平和について考え、身近なところから行動していくことの大切さを実感しました。例えば、差別や偏見をなくす努力をしたり、争いを避ける姿勢を持つことも、平和への一歩だと思います。

広島での学びは、私の心に深く刻まれました。この体験を忘れず、平和の大切さを周囲にも伝えていきたいです。そして、未来に向けて、争いのない世界を築くために、自分にできることを少しずつでも実践していきたいと思います。

福栄中学校 滝澤 青葉

平和学習青少年派遣感想文

私は今回、広島平和記念資料館や小学校の資料館、当時のまま残っている建造物「原爆ドーム」を訪れて、戦争や原爆について学びました。これまで歴史の授業やテレビ番組等で「戦争」「原爆」の悲惨さについて学んできましたが、実際に広島に訪れ、自分の目で見て、耳で聞くことでこれまでとは全く違うそれぞれの重みを感じました。具体的には、「原爆ドーム」の前に立った時、八十年前のあの日に、ここで多くの人が一瞬にして命が奪われたという現実に言葉を失いました。教科書ではきっと学べない、実際に起こった出来事や当時の人々の想いに触れ、強く心を動かされ、今まで「原爆は怖いもの」という程度にしか思っていなかった私にとって、今回の学習は衝撃的で忘れられないものになりました。



▲ 原爆ドーム

広島平和記念資料館には、戦争や原爆の被害を伝える多くの展示があり、原爆が投下された直後の広島の様子を示すジオラマや、実際に被爆した人々の遺品や写真が展示されており、その悲惨さは思わず目を背けたくなるようなものばかりでした。被爆した子供の焼き焦げた弁当箱や、黒く変色した衣服、壁に焼き付いた人の影の写真が悲惨な現実を捉えていて、その様子を想像すると胸を締め付けられるような思いになりました。その中で、特に印象に残っているのは「八月六日、今日も元気で学校に行きました。」と日記に書いた少女が、その日被爆し命を落としたという話です。もし原爆が落とされていなければ、その少女は今もどこかで元気に暮らしていたかもしれません。また、被爆者の方のお話を聞く機会もあり高齢になつても当時の記憶を語るその姿には、強い意志と願いが込められていると私は感じた。私たちは、戦争を知らない世代ですが、だからこそこうして語りついてくれる人達の声に耳を傾け、その思いを次の世代に伝えていく責任があるのだと思いました。

戦争では、たった一発の爆弾で何万人もの命が奪われ、街が消え、家族が引き裂かれました。今、自分が当たり前のように生活している日常が、どれほど貴重でかけがえのないものなのか気づかされました。戦争は「昔の事」ではなく、世界のどこかでは今も起こっている現実なので、「平和」は任せではなく、自分の意識や行動で示すことで守っていくものだと感じた。

今回の広島での平和学習を通して私は、「知ること」の大切さを学びました。現地に行って自分で見たり聞いたりして現実を知ることで、正しい知識が得られる。それを周囲の人々に伝えていくことが、自分なりの第一歩だと考え、被爆者のように未来に平和をつなげる一人として私はこれからも様々なことを学び、行動していきたいと思います。



▲ グループワークでの発表

東国分中学校 蕭 孝美

平和学習青少年派遣事業に参加して

私が平和学習青少年派遣事業に参加させていただいて、学び感じたことを一日毎にまとめます。まず 1 日目、最初の見学地である被服ししよう倉庫で、爆風によってどのような被害があったのかをみました。外側の鉄が凹んだり欠けていたり、内側にある窓ガラスも割れていったりなど、爆風の威力、また恐ろしさを学びました。そして次に行った平和資料館では、沢山の残酷なもの達を目の当たりにしました。原爆で火傷を負った人々の写真、子供を背負って皮膚がどろどろに焼け溶けて歩いている母親の絵など、想像もできないけれど、実際に起こった過去の出来事の悲惨さを訴えるようなものが展示されていました。私の中で印象に残った展示は、子供と離れ離れになってしまった母親の子供へ向けた手紙です。その手紙の最後に「さよなら」と書かれているのを見て、今私に両親がいるという事が当たり前ではない、その大切さを改めて感じました。

2 日目は、平和記念式典に参列させていただきました。多くの参列者が並んでいて黙祷までには着席できず、立って黙祷を捧げました。式典では何度も鳥肌が立つことがあり、特に、子供代表の平和への誓いに感銘を受けました。平和公園内に響き渡る、力強くはっきりとした声でした。式典後、平和公園を見学しました。日本だけでなく韓国などの異国の人も被爆者であるのを忘れてはいけないということや、原爆が投下される前の広島の姿を模型にしたものを見学し、原爆ドームを取り壊して欲しいとの意見がある理由などをたくさんの人から教わりました。私がそこで 1 番心に残ったのは、式典などを見ていると日本が被害を受けただけに見えるが、日本も戦争をする側である。という言葉です。それを聞いて、日本にも問題があったからこそ国と国とのぶつかり合いが起きたのだと思いました。その後、本川小学校、袋町小学校を見学し、当時の小学生がどのように過ごしていたのか、また教室の窓ガラスが割れたりなど、学校全体の被害を学びました。夜は、灯籠流しをしました。沢山の灯籠で輝いていた元安川には、外国から来た人達も多くいました。それを見て、日本の原爆の事を知ろうとしているのだと感じ、嬉しく思いました。元安川を挟んだ向こう側に音楽に乗せてプロジェクションマッピングがありました。途中で原爆ドームから丸い地球の形に変化した瞬間があり、広島の原爆は世界の全ての国が関係しているのだと思いました。

最終日は平和資料館の下の大広間で行われた「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加しました。それは全国の市町村の代表の小学 6 年生から中学三年生までの人们が集まり、グループを作りながら意見を交換し合い、自分の知識を深めるというものです。私は、話し合いで自分が日本と台湾のハーフという立場を活かしながら日本だけでなく世界に目を向ける事などの話をしました。今まででは、自分の意見を中心に考えを深めていたけれど、この集いを通して全然違う観点からの意見を聞けたりして、話し合いの大切さを改めて知りました。

私がこの3日間を通して感じたこと、分かったことは、行く前、広島は残酷な出来事があった場所というイメージだけだったけれど、それだけではなく、残酷な出来事があったからこそこれからの未来への課題や、それに向けた取り組みに力を尽くしていることです。けれど戦争というものの自体あってはならない事であり、今でも核兵器廃絶を求めている人達が多くいる中で、唯一の被爆国である日本は核兵器禁止条約に参加していません。それが今の日本の課題なのではないかと思っています。

そのような事から、今私達若者にできることは時間が経つと薄れていく人々の記憶を後世に残すために、一発の原子爆弾が、無差別に多くの命を奪ったという過去の出来事や、核兵器の恐怖を伝えていくことだと思います。この先二度と戦争が起きないように、自分に出来ることを考えて日々生活していきたいです。

最後に、市川市長様をはじめこの派遣事業に携わって下さった全ての皆様、当日引率して下さった方々、この様に広島の原爆のことについて深く学ぶ貴重な機会を与えて下さり、本当にありがとうございました。



▲ 平和記念式典 黙とう

大洲中学校 勢能 茉那

広島で学んだこと

私は、三日間の広島派道に参加しました。行く前は、広島の原爆については教科書や映像で学んだ程度で、「悲しい出来事」という漠然とした認識しかありませんでした。もちろん二度と繰り返してはいけないことだという思いはありましたが、どこか自分とは遠い歴史の一部だと感じていました。

一日目、私たちはまず陸軍被服支廠倉庫を訪れました。そこは戦時中に軍服や物資を保管していた大きなレンガ造りの建物で、原爆の爆風にも耐えた貴重な遺構です。壁や鉄でつくられた窓にはっきりと残る爆風や熱の跡を見て、あの日の衝撃の大きさを想像し、胸が締めつけられました。その後、平和記念資料館に行きました。館内には、焼け焦げた衣服や溶けたガラス瓶が展示されていて、変形してしまうほどの熱と衝撃が、一瞬で街を破壊したという事実に言葉を失いました。被爆直後の街の写真や熱風で真っ黒焦げになっている人々の写真はあまりに生々しく、原爆は「ただの爆弾」ではなく、一瞬で無数の命や日常を奪い去る恐ろしいものだという現実を突きつけられました。

二日目は、朝から平和記念式典に参加しました。八時十五分、平和の鐘が鳴った瞬間、街全体が一気に静まり返りました。会場にいた全員が真剣な表情で黙祷を捧げています。目を閉じると、焼け野原となった街や命を奪われた人々の姿が浮かび、二度と同じ悲しみをくり返してはいけないという思いと共に、平和な未来が途切れないように祈りました。その後、小学校六年生の子が平和への誓いを力強く語っていました。その真剣なまなざしと迷いのない声にこめられた思いが心の奥まで響きました。式典の後、爆心地からとても近い本川小学校と袋町小学校の資料館に訪れました。袋町小学校のろう下の壁には被爆者の消息を知らせる伝言が多く書かれていました。一つ一つの文字から当時の人々の思いや不安、希望が伝わってきて平和の大切さを改めて感じました。夕方には灯ろう流しを体験しました。川面に流れる灯ろうの光は静かで美しくそれが亡くなった方々への祈りであると思うと、心が静まり、命の尊さを実感しました。

三日目は、被爆者の方の講演を聞きました。実際にあの日を生き抜いた方の声は重く、当時の状況や苦しみが直接胸に迫りました。「命がある限り、体験を伝え続ける」という言葉に、平和をつなぐ責任を強く感じました。その後、他県から来た中高生と意見交流会を行いました。互いの地域で起こった被害や平和はどのようにしたらなるのかを語り合う中で「知ること」が平和への第一歩だと感じました。

この三日間で、私の原爆や戦争への見方は大きく変わりました。行く前は「悲しい歴史」としか思えなかったことが、今は「今の私たちの行動で防がなければいけない現実」だと感じています。戦争や核兵器の恐ろしさは本や映像だけでは本当の重みが伝わりません。現地で見て、聞いて、感じたことを、私はこれから周りの人に伝えていきたいと思います。そして、平和な未来を守るために、自分にできることを考え続けていきます。



▲ 完成した どうろうの色紙をお披露目



▲ どうろう流しとドローンショーを見つめる

南行徳中学校 森田 陽与

私たちがつなぐもの

平和公園に訪れたとき、公園全体が、穏やかで優しい、平和な雰囲気に包まれていました。あの日、いま自分が立っている場所で、何万人もの人が亡くなつたことを一瞬忘れてしまうほどでした。ですが、公園のあらゆるところに、慰靈碑、パネル、原爆の惨状を思わせるものが溢れています。私は、てっきり日本人だけが慰靈碑を建てられていると思っていたのですが、そうではなく、原爆で亡くなつた外国人の慰靈碑もありました。韓国人慰靈碑では、韓国で縁起のよいとされる亀が彼らの故郷の方向を向いているデザインになっており、外国人だからといって雑に扱わず、ちゃんと文化を尊重してお墓が建てられていることに感服しました。



▲ 韓国人原爆犠牲者慰靈碑

平和式典に向かう途中、朝早いのにもかかわらず、参列者の長蛇の列ができていました。蝉の声がよく響いており、その声を聞きながら、私は原爆投下の日の朝も同じように響いていたのだろうなと思うと、心が苦しくなりました。黙とうの時間になると、街全体が静かになり、お年寄りから小さい子供まで一体となって「平和」を祈っている姿に、私は神聖な気持ちになりました。式典が終わってからも、原爆の紙芝居を行っている学生たち、ピアノ演奏、リーフレットを配るボランティア団体、無料で献花用の花を配る人たち、それぞれができる平和への活動を行っていました。中には、たまたま居合わせた方から当時の平和公園周辺の様子について話を聞いていただきました。それだけ身近に被爆者がいることもそうですが、見ず知らずの私たちにそういった話をしてくれたことからも、「ああ、ここでは日常的に伝えてくれている人がいるんだ。」と驚きました。

原爆資料館では、外国人が大勢おり、原爆の惨状を知ってくれようとしていることが嬉しかったです。展示品はあまりにも悲惨すぎて、目を背けたくなるものしかありませんでした。涙ぐんでいる方もいました。路面電車で立ったまま亡くなった人、全身に大やけどを負った子供、溶けたガラス瓶。刺激が強いと言われるであろう遺品や写真や絵が、ありのままの悲惨さを伝えていました。それは、見たくないと思うものをきちんと見て受け止めなければ、原爆、戦争の怖さは伝えられないからだと思います。過去の悲惨なものを見た後に、通った渡り廊下からいつもと変わらない景色が見えた時、自分たちが置かれている場所がいかに平和か、改めて体全体で感じました。戦争の悲惨さが分からなければ、平和のありがたさが分からないと思いました。

原爆投下は正当だったかというアンケートで、今の時代になって、アメリカでは多くの若い人たちが正当ではなかったと答えています。体験者が、勇気を出して忘れててしまいたい記憶を私たちに伝えてきたことで、平和な世の中がいいと思う人が増えた結果だと思いました。今回、参加した青少年平和の集いで、戦争を知らない同世代どうして意見交換し、それぞれの地域に持ち帰って伝えていくように、体験者から非体験者へバトンをつないでいくことで、その人たちの平和を願う思いが永遠になるのではないでしょうか。今年は終戦 80 年。どんどん体験者は減っていき、いつかはいなくなってしまう日が来ます。バトンを受け取ろうとしている私たちがやらなければいけないことは、どんな形であれ、原爆、戦争を知って、理解し、伝えていく作業だと思います。これからも核を使わずに済むように。「また明日ね」といえる日が続くように。

妙典中学校 高口 紗禾

戦後 80 年を迎える今思うこと

80 年前の 1945 年 8 月 6 日、世界で初めて広島県広島市に原爆が投下されました。1 発の原子爆弾により、今まで当たり前のように行っていた日常のすべてが奪われ、広島市は一瞬にして一面火の海となりたくさんの命が失われました。その後も放射線による影響で多くの人々が後遺症に苦しみ、差別や偏見を受け、今現在も肉体的にも精神的にも苦しんでいる現状があります。

今回、平和学習青少年派遣事業に参加するにあたり、事前学習で被爆者の児玉さんのお話を聞きする機会がありました。原爆は怖くて恐ろしいものとしか感じていなかった自分の考えが浅はかだったと感じられるほどスクリーンに映し出された当時の様子が想像していた以上の惨状で言葉を失いました。今では毎日通えている学校も当時は行きたくても国のために子供までもが学校に行かず、働いていたり、戦時下の暮らしの実態を知り、驚きました。児玉さんの「生きていることに罪悪感を抱いていた。」という言葉に、とても心が痛くなりました。

児玉さんの話をふまえて実際に広島市へ訪問し、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す多くの写真や資料を見学し、想像を絶する凄まじさに言葉をなくしてしまいました。その資料の中にはボロボロになった子供の衣服や頭巾があり、あの日の一瞬の出来事でたくさんの子供の命と笑顔を奪ったと知り、私は心を突き刺されたような感覚になりました。また、2 つの小学校にも訪れ、たくさんの生徒が通いにぎわっていたはずの学校も頑丈な校舎の地下さえもが、骨組みだけになってしまうほどの爆風によって壊されていて本当にここに生徒がいたと思うと、背筋が凍りました。

この3日間を通して、私は感じたことがあります。「平和」は当たり前ではなく、原爆が投下されたという事実があり、たくさんの犠牲があって今この平和という日常があるのではないかと思います。今を大切に生き、そして、原爆がもたらした悲劇を繰り返さないために、私たちは過去の歴史を学び、平和の大切さを忘れないようにしなければなりません。そのために戦争という武力ではなく、争いを解決するためにはどうすればよいかを考えることが、平和な未来を築くために重要だと考えます。現地に行き、培えることができた学びを生かし、次世代へつなげていきたいです。最後に、終戦80年がたった今この派遣事業に参加し、いろいろな学びを得ることができ、本当にいい経験になりました。このような貴重な事業に参加させていただき、ありがとうございました。



▲ とうろう流しの色紙を作成中



▲ 原爆ドームの対岸で流されるとうろう

塩浜学園 上原 花音

私は八月五目から八月七日までの三日間で平和学習派遣員として広島へ行きました。

一日目は、旧広島陸軍被服支廠倉庫と平和記念資料館を見学しました。旧広島陸軍被服支廠倉庫では、爆風によって変形した鉄扉が特に印象に残りました。私は原爆や戦争といわれると、火や爆発というイメージが強かったのですが、変形した鉄扉を見て火や爆発だけではなく、爆風による被害も大きかったと分かりました。また、陸軍倉庫のため当時でも最先端のイギリス積みという技術でレンガを積み、作られていたことも知りました。

平和記念資料館では、原爆による人間への害や原爆から出る熱線、放射線の他にも高熱火災や爆圧振動などの教科書には書いていないような害についても知れました。その中でも特に「魂の叫び」というコーナーが一番印象に残っています。魂の学びというコーナーは、被爆者が発した言葉とその人の顔写真と遺品とそれらについての解説があるコーナーです。魂の叫びの被害者が発した言葉は、私に語りかけてくるようで、当時のその方の状態や暮らしなどが頭に浮かんできてとても心に残りました。

二日目は、平和記念式典に参列し、平和記念公園と本川小学校平和資料館と袋町小学校平和資料館を見学しました。平和記念式典では、広島の方から外国の方まで多くの方々が参列されていました。たくさんのお話がありましたが、その中でも「平和の誓い」というお話がとても印象に残っています。その中で一番印象に残っている言葉は、「One voice」たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずだ、という思いが込められているそうです。私はこの言葉を聞いて、平和や戦争について知るだけではなく、伝えていく立場になっていかなければならぬと思い、すごく心を動かされました。

本川小学校平和記念資料館では、被爆したその時の状態ができる限り残しているということで、とてもボロボロで被害を受けた場所というのがとても分かりやすかったです。その中で一番印象に残っているのは、校庭から掘り出された遺物です。校庭から掘り出された遺物は、熱で溶けて固まった物や熱風、爆風にさらされた物の一部が、触れられるように展示されていました。持ち上げてみると、とても重くて驚きました。また見た目だけでは何か分からぬ程、溶けて色々な物が固まった物でした。実物に触れてみると原爆がどれだけ恐ろしい物なのか再認識させられました。

袋町小学校平和資料館では、安否確認のためなどにチョークで書かれた伝言が一番印象に残っています。事前学習で伝言をかいていたということは知っていましたが、実物を見ると本当にこんなできごとがあったのだと複雑な感情になりました。

三日目は、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。ヒロシマ青少年平和の集いでは、グループワークを行いました。グループワークでは、自分達の地域が受けた被害やそれぞれの平和への考え方について話し合いました。千葉にも空襲があり、中心部の被害は大きく市街地の七割が焼失してしまったそうです。平和への考えは、みんなかぶつてしまい中々話が進まないだろうと考えていましたが、一人一人が違う意見を出し、戦争がなくなるだけではなくて食困やいじめ、暴言がなくなることなど、人それぞれ平和のために求めることが違いました。

私はこの三日間を通して、被爆者の方々から聞いたお話しや広島に来て平和学習をさせてもらえたことを生かし、戦争の悲しさ、原爆の恐ろしさを伝えていく立場になっていきたいです。戦争を他人事ではなく、自分のことのように考えて世界を平和にしたいと思う人々を増やしていきたいです。私達子供でもできる限りのことを行い、一人一人の平和を求め、争いのない世界を作っていきたいです。



▲ グループワークでの話し合い

被爆80周年
Commemorating 80 years since the atomic bombing

広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式
HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

令和 7 年(2025年) 8 月 6 日

August 6, 2025

広 島 市
The City of Hiroshima

式次第

Program

開式	8:00	Opening
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8:00	Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式辭 広島市議会議長	8:03	Address Chairperson of the Hiroshima City Council
献花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来賓	8:08	Dedication of Flowers Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8:15	Silent Prayer and Peace Bell
平和宣言 広島市長	8:16	Peace Declaration Mayor of Hiroshima
放鳩		Release of Doves
平和への誓い こども代表	8:24	Commitment to Peace Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8:29	Addresses Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8:46	Hiroshima Peace Song (chorus)
閉式	8:50	Closing

平 和 宣 言

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島の街で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を荼毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかつたことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためにには、たとえ自分の意見と反対の人があってもまずは話を聞いてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約9割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためにには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらし得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自國のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がつていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないN P T（核兵器不拡散条約）が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずです。是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御靈に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年（2025年）8月6日

広島市長 松井一實

式　　辞

本日ここに、石破内閣総理大臣を始め、ご来賓各位、被爆者、ご遺族の方々のご臨席と、国内外から多くの皆様のご参列のもと、広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式を挙行するに当たり、原子爆弾の犠牲となられた多くの御靈に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

80年前の8月6日、一発の原子爆弾により、広島の街は一瞬にして破壊され、多くの尊い命が失われ、かろうじて生き延びた人々も、言葉では言い尽くせないほどの苦難の人生を歩んでこられました。被爆者を始めとする広島市民は、こうした悲惨な体験を根底に据え、被爆の実相を伝え、平和の尊さを訴え続けています。

しかしながら、今、世界では、各地で戦争や紛争が絶えず、核兵器の使用を示唆した威嚇や核戦力の増強を行う国があるなど、核兵器を取り巻く国際情勢は急速に悪化しています。

こうした中、昨年12月に、核兵器廃絶のために凄惨な記憶と向き合いながら自らの体験を世界に伝え、核兵器の非人道性を訴えてきた日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。

国際社会は、この歴史的意義を深く認識し、被爆者の「こんな思いを他の誰にもさせてはならない。」という思いを受け止め、被爆80周年となる今年を、戦争がなく、誰もが安心して暮らせる平和な世界に向け、強く決意し、行動を示す年にしなければなりません。

私たちは、これからも平和を希求する人々と手を取り合い、核兵器廃絶、そして世界恒久平和の実現に向けて全力を尽くすことを、ここに改めてお誓い申し上げます。

本日の式典に当たり、原子爆弾の犠牲となられた御靈に対し、謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、今なお後遺症に苦しんでおられる被爆者並びにご遺族の方々への援護のより一層の充実を念願いたしまして、式辞といたします。

令和7年（2025年）8月6日

広島市議会議長 八條 範彦

平和への誓い

いつかはおとづれる、被爆者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

涙とともに止まらない、絶望の声。

一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、

本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、

直接話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、

記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。

大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。

多様性を認め、相手のことを理解しようとしてすること。

一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、

傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。

周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、

いずれ世界の平和につながるのではないかでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。

あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、

私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和7年（2025年）8月6日

こども代表

広島市立皆実小学校6年

せきぐち ちえり
関口千恵璃

ささき しうん

広島市立祇園小学校6年 佐々木 駿

「第1回全国平和学習の集い」参加証

あなたは「平和を愛するこども」の代表として
全國のこどもたちと一緒に平和を学び真剣に討議
したことを証します
これからもヒロシマで得た「平和の心」を広く
伝えていってください

令和7年8月7日

平和首長会議会長
広島市長

松井一實

この紙は平和記念公園に捧げられた折り鶴を
再生して作られています



おわりに

本事業を通して、参加した生徒たちは、広島での多くの出会いや学びを通じて、平和の尊さを自らの言葉で考える貴重な経験を得ました。現地で感じたこと、見たことを、それぞれが今後の生活や活動の中で伝え、次の世代へつなげていくことが期待されます。

なお、派遣の様子をまとめた記録動画を、市川市公式 YouTube チャンネルに掲載しています。現地での学びの様子や、生徒たちの表情や発言、平和への思いを、ぜひ多くの方にご覧いただき、共に考えるきっかけとしていただければ幸いです。

動画は、右の二次元コードから、または YouTube にて「市川市 平和学習青少年派遣団 動画」と検索してご覧ください。



市川市 平和学習青少年派遣団 動画

市川市の平和啓発事業

■ 平和の折り鶴募集

毎年広島・長崎で行われている平和記念(祈念)式典へ向けて、市民の方々が折った千羽鶴を、平和への架け橋となることを願い、両市へ送呈しています。送呈前には「平和の折り鶴展」として展示しています。(5月から6月頃)

■ 平和パネル展

市内公共施設において、パネル展示を行っています。(8月頃)

■ 平和寄席

「日常忘れかけている心のゆとり」と「笑いの絶えない明るい家庭」との観点から、笑いを通して「平和の大切さ」を訴えています。(10月)

■ 平和ポスター

市内小・中学校に在学している児童・生徒の心でとらえた平和を訴える作品を募集しています。応募作品の中から18点を活用して「平和カレンダー」を作成、また「平和ポスター作品展」を開催し平和意識の高揚を図っています。(募集9月・展示11月～12月頃)

■ 被爆体験講話

市川被爆者の会と連携し、小・中学校での被爆体験講話を実施しています。

■ ビデオ・パネルの貸出

平和に関するパネルや映像資料の貸出を行っています。

「原爆と人間」パネル：被爆者の証言と写真を中心とした原爆展用パネル。

■ 被爆樹木二世アオギリ

核兵器廃絶平和都市宣言40周年(令和6年)を記念し、植樹したアオギリの生育状況を市公式ホームページにてお知らせしています。

そのほか、中央図書館(メディアパーク市川内)の展示コーナーに原爆・戦争に関するパネルを展示しています。

令和 7 年度
終戦 80 周年事業

市川市平和学習青少年派遣団報告書

令和 7 年 11 月発行

市川市 総務部 総務課

〒272-8501 市川市八幡一丁目一番一号
TEL 047-334-1111(代表)
FAX 047-332-7364

